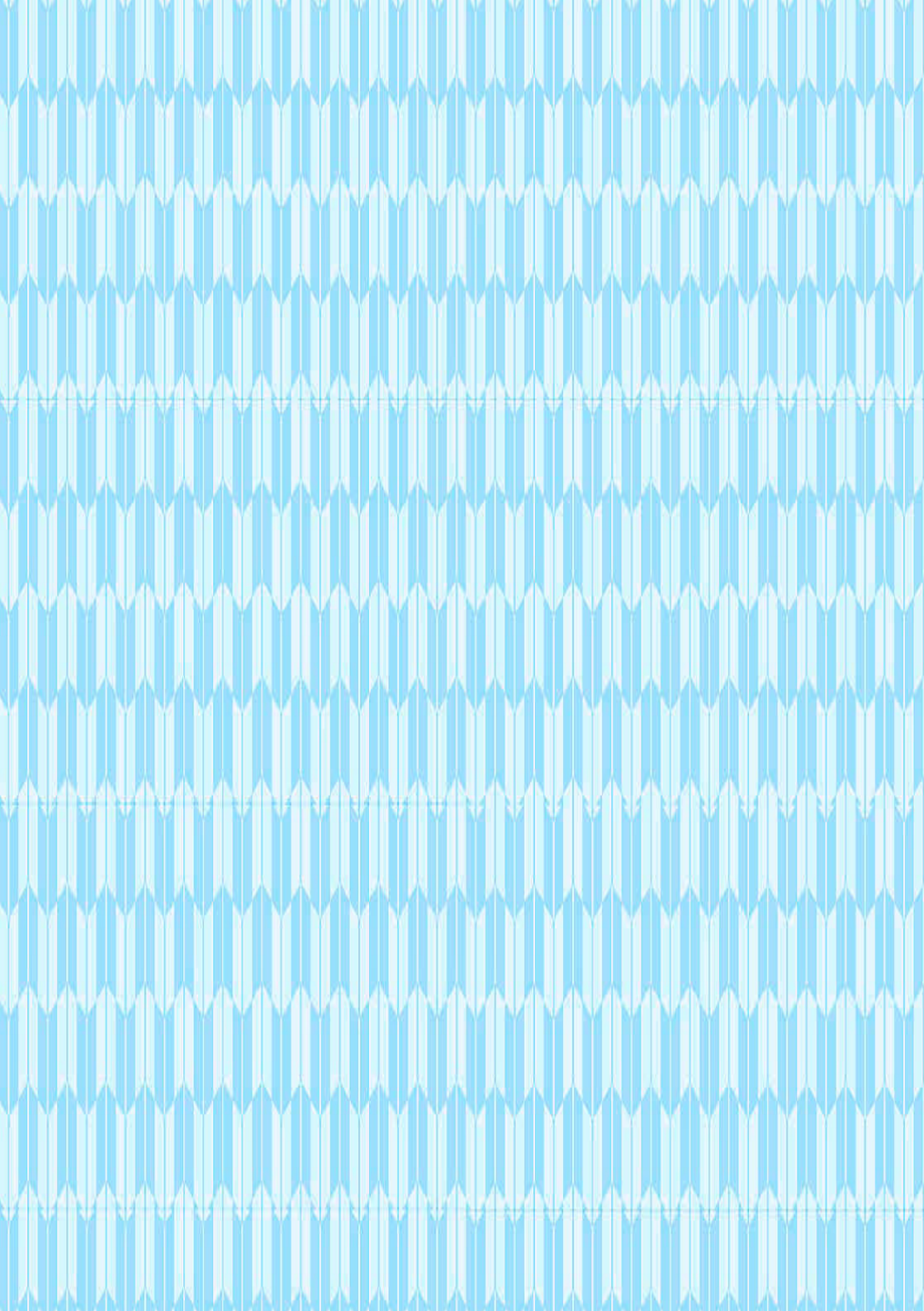


あを 10

2025



撮影：墨沱



皆 蚓 龜 蛇

足を出し手を出しすすむ谷の霧 竹僊



あそ

十月集

坐・誹

佐藤 竹僊

廣大なシートで覆ふ草いきれ

蚊を打ちし手をしなやかにもどしたる

どこからも血の出る體蚊遣香

月の地の暑きとおもふ熱帯夜



廣き葉のまためてこぼす夏の雨

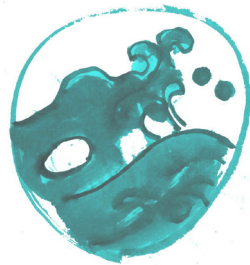
雲の浮く畑のもろこし食べたいな

蜻蛉羽化その日いち日雨や風

知らぬところへ來た飛びやうの鳳蝶

能登牡蠣を賣る青年は大海^{ひろと}てふ

小夜千鳥飛べるあひだに文様に



影法師

須賀敏子

産土に妹住みをり帰省かな

秋めくや今日の曜日を確かむる

ベランダに干し物少し鬼やんま

統計で一番暑き夏終わる

病院の広き敷地に曼珠沙華

赤とんぼ何時もの公園園児の声

踏切やカンカンカンと猫じやらし



稲刈り

長崎 桂子

思ひ出は悲しいこと多い八月

テレビに終戦時の悲報悲しすぎます

三重南部 三月田植七、八月稲刈り

雑草をぬく地面見え嬉しかな

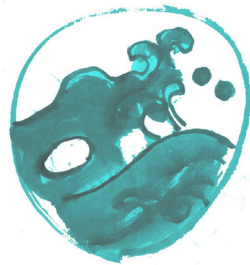
雑草に負けぬと伸びる百合の花

白百合やすつくと伸びて清清し

顔面を汗ながれゐて庭せいり

跣にて突堤まはり楽しみて

突堤の心地よき風よみがへる



天辺の

森
な
ほ
子

蓮華升磨まづ天辺の玉ひらく

牧場に女棲みつく雲の峰

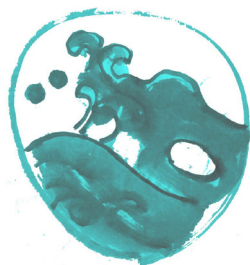
降りだして止んで又ふる捻り花

山中に河辺に廃墟桐の花

夜明けまでまだ間のありぬ夏銀河

大通り一本入る夏暖簾

代替りしてより遠き盆帰省



穴惑ひ

赤座典子

文鳥も吾も爪伸びてをり秋初め

秋時雨家の鍵には干支の鈴

蛇口より湯が出る日々や荔枝熟る

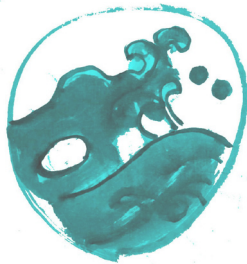
ただ臥し居り贅沢過ぎる広島忌

暮れ残る越後の風に爽気あり

ブリンカー我が孫も着け夏期講習

溶岩となりて漂ふ秋旱

九十四歳 穂吉 敏子 穴惑ひ



底なしの暑さ

秋川

泉

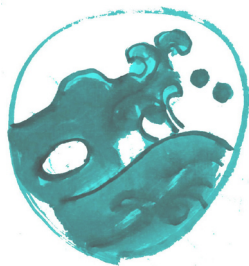
朝顔や切れ切れに咲く小さき花
底なしの暑さの沼にはまりけり
暑気あたり地をはふごとく家事をする
夏負けし赤鯰鱈になりにつけり
西瓜だよもう来なくても食べちゃうよ
生御霊あと一球と息ころす
落雷やおびえる猫を抱きしめる
うねうねと続く坂道せみしぐれ
しなやかに踊れ踊れと流れゆく
新涼や子ら軽々とすべり台



四十度

七郎衛門吉保

四十度蟬も脱皮を控へけり
無頼漢世界を脅す極暑かな
ミンミンとラジオ体操六時半
外へ行け！外へ行くな！と夏休
主人留守蔓伸び放題の大暑
手に四種五粒の薬百日紅
三歳の記憶忘るな敗戦忌
沖縄に歓喜熱気の野分立つ
秋立つや山の木立を重くして
四十度食欲の秋まだ遠し



秋彼岸

篠田純子

胡麻おはぎ一辺倒の父であり

戦死の叔父の骨壺小さし秋彼岸

卒塔婆に先祖代々萩尾花

トランジスタグラマーの祖母稲の花

秋ともし唱ふ御詠歌七五調



撮る阿呆

篠田大佳

朝曇市場の粹を見にいかう

レジスター壊れるほどの暑さかな

八月六日核戦争の水際で

曲調を変へど晩夏の愛の歌

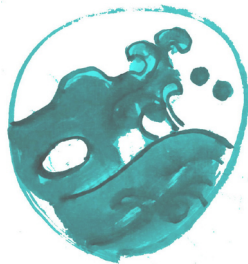
盆踊踊る人なき夕なり

盆踊踊る阿呆に撮る阿呆

秋はじめギャルは老婆に席ゆづる

雑草の雑味の欲しき秋の蜂

八月尽明日も八月ならんかな



秋收集

さくらから紫木蓮までブランコで

佐藤 竹僊

夏競馬破滅の預言当たるなら

篠田 大佳

アイスティー毒吐いてより笑まひけり

汽笛一声月なき夏の常夜灯

今日も又ゴジラの様な暑さかな

須賀 敏子

茄子胡瓜四つ足付けて曲がり角

鉄線花そだてて住まひ引立てる

長崎 桂子

山並つらね水ゆたか稲げんき

容赦なくドア開きけり冷房車

森なほ子

木々の香の濃くなつてゐる夕立雲

夜濯や気の紛れしと独りごつ

赤座 典子



見舞ひ終ふバス停で浴ぶ蟬時雨
粥飯と点滴が友夏休み

七郎衛門吉保

病室に蜘蛛歩き出し底ひけり
病床に聴こゆ励みの盆踊
病臥より見上ぐ夏空無限大
小鳥待つ夏の館に帰還兵
漁師より勤労対価の鰯二ひき
馬冷やせそれ牛冷やせ鶏冷やせ
もくもくと雲の湧き出る夏野原
自転車で追ひ追ひかけて遠花火
回転するめまひ遠く蟬の声

篠田純子

秋川 泉

喜孝抄



八月号作品より

赤座典子・篠田大佳・佐藤喜孝

太陽 盡く 數刻前の熱さかな

佐藤竹僊

「盡く」を「ことごとく」と読んで、句を読みました。太陽から届く熱は空気を温めて、時間経過と共に気温が上昇するというのは、夏の時だけ思い出す知識です。おおよそ、一日の最高気温となりやすい午後二時の気温は、最も暑い正午の頃の太陽の光が温められるのに二時間かかるといえます。その知識は、今という時間は、時間の連続が切断された瞬間ではなく、過去が原因となった結果に起こるというのを再確認させてくれます。（大佳）

この 蟲も 病も 名を得 冷奴

佐藤竹僊

今回、名前が判明した事項が、二点ありました。一つは、ある虫の名前です。もう一つは、作者が長年苦しめられていた症状の病名です。重要度では差がありますが、双方一歩前進というところで、冷奴で祝杯というところでしょうか。昔から言われている「一病息災」で、過ごせる日々が、早く来るといいですね。（典子）

浮いてきて 亀吾を見つむ 蓮の池

篠田純子

蓮池に行った作者。蓮池から亀が顔を出して、作者の方を見つめています。映像を切り替えると、亀の目には、亀を見つめている作者の姿が映っているはずです。亀と作者が見つめ合っている、目と目で語り合っているとは言えない、かといって、緊張とも言えない、池にゆっくりと流れる時間を読みます。(大佳)

透し見る蓮の葉脈手の血筋

篠田純子

植物と人間を比べる訳ではないが並べられてゐる。透けて見える蓮の葉脈。つい自分のてのひらと比べてしまふのだ。蓮の葉脈は血管であり骨の役目をしてゐる。蓮の葉としてのひらとが比べられものとして比べてゐる。おもしろい感覚だ。純子さんには『あを』の表紙に写真を提供していただいてゐる。七月号は蓮の花で飾つた。写真を撮りつつ俳句を作られてをられるのだらうか。今はやりの二刀流である。(喜孝)

漢語なる老婆の叱言梅雨曇

篠田大佳

「叱言」を「ごごと」と詠むことと、意味が「咎めたり非難する言葉」と調べて分かりました。日本語ではない、多分中国語で、見知らぬ老婆が、何かに文句を言っている。そういう場面に、作者は遭遇しました。梅雨時のどんよりとした曇り空と、言葉の重苦しさが作り出す風景を、しっかり捉えています。(典子)

夏やカフェ赤子叫ぶもジャズの内

篠田 大佳

上五を「夏のカフェ」と詠むとカフェを無理に季語としてゐるかにみえてくる。そこを考慮して「夏やカフェ」とすることより季語が「夏のカフェ」から「夏」と無理なくをさまつてゐる。

カフェのBGMにジャズが流れてゐる。その中で赤子が大きな声で泣いてゐる。こんな景を詠んでゐるやうだ。流れるジャズに赤子の泣き声は障ることもない。大佳さんにはジャズと和してゐるかに聞こえてゐるやうだ。「泣く」と「叫ぶ」とではやうすがちがふ。やさしい心持の句。（喜孝）

梅雨晴間下校の子等はスキップで

須賀 敏子

雨に付随する感情というのは、憂鬱なものです。エネルギーが内に籠つていき、発散したくて仕方がなくなります。学校に通っている子どもたちは、特に気持ちちが籠りやすく、雨の合間の晴れの日に、いつもより活発に動き回ります。気持ちちが晴れやかになった子どもたちの心の内を読みます。（大佳）

今日の空山紫陽花の花の色

須賀 敏子

「山紫陽花の花の色」といつても紫陽花のこと、色は移り気でさまざま。しかし敏子さんには印象的にこの花の色が臉裏にある。その花色とこの空の色は同じだなあと眺める。私にもやさし

い山紫陽花の花の色が浮かんできた。花の色に包まれる幸せな仕上がりである。のびやかな作品である。（喜孝）

枇杷むいて笑顔を交し思ひ切り

長崎 桂子

枇杷の実は、種ばかり大きいとか、出回る期間が短いとか、とかく言われていますが、それでもその美味しさには、多くのファンがいます。作者も、最高の出来の枇杷にめぐり合えて、「やったね！」と同好の士と笑顔を交わしました。その気持ちよくわかります。（典子）

協道にびつしりきれい虞美人草

長崎 桂子

虞美人草は雛罌粟・コクリコ・ポピーなどとそれぞれ魅力的な別の呼び方があります。ところがよく調べると毒草の類ださうです。ナガミヒナゲシなどは除去の方法はこうこうと書いてあるネットもありました。植物に詳しい桂子さんのことこんなことは先刻承知。路傍に生えた草花を「虞美人草」と誉めそやして楽しまれてゐる。私も今年は庭先に繁殖しアゲハチョウが訪ねてきたりと楽しませてもらつた。（喜孝）

乗り換への束の間京の夏匂ふ

森なほ子

今回のなほ子さんの旅は、京都で乗り換えるものでした。時間的にはほんの少しでしたが、しっ

かりとその地を感じることが出来ました。やはり京都は独特なのでしょうね。「夏の匂い」とさげなく詠まれています。目的地も気になりました。(典子)

葉 桜 や 媼 出 歩 く 時 間 帯

森なほ子

この句を「秋収集」に書きたく選んだ。が書き始めて早速躓いた。「時間帯」と書いてあるが一日の朝か夕べかヒントがない。しかし失礼だが、なほ子さんは媼の習性を確り把握されてゐるらしい。

春から暑い夏へと移行する葉桜の季節。この句に登場する媼はなかなか元気である。矜持を持った媼たちである。「出歩く時間帯」は不完全な表現に思へるが、さうではないかもしれない。このやうに書くことにより生かされる媼ではなく生き生きと生きてゐる媼がある。現代の翁にはこのふてぶてしさが残念。(喜孝)

梅 雨 です ね 話 題 見 つ か る 美 容 院

赤座典子

年齢が離れていたり、あまりにも文化が違いすぎたりして、共通の話題の糸口が見つからないということはよくあると思います。若い世代に話を合わせるにしても、若い世代には世代の共通体験がなく、AIに与えられたおすすめにしたがって、時間を消費しているという具合で、最近の若い人ほど一括りにできない、ある種の孤独を感じます。掲句の光景に話を戻すと、会話の糸

口が見えない美容師さんと、王道の天気の話が続いて、共通の話題をなんとか見つけた作者の安堵が聞こえてきそうです。(大佳)

一人居の時の記念日ちぎれ雲

赤座典子

この句の一人居の人は年中さういう状態ではない。だから「一人居」が特別におもへる。そのやうなおもひに耽つてゐるとき、さうだ！時の記念日だ。一見「一人居」に関りがないこのことばが命を得たやうに存在感を増す。不安感に包まれたこの時を「ちぎれ雲」が象徴的に浮かんでゐる。(喜孝)

我が身にも代田の頃のありにけり

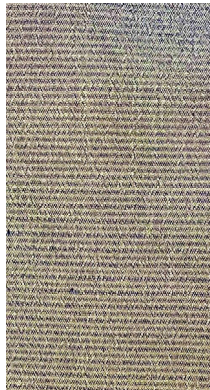
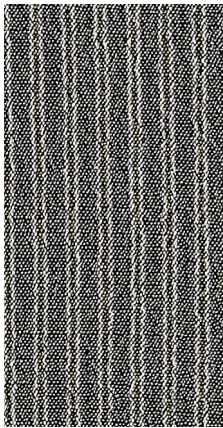
七郎衛門吉保

代田とは、代掻きが終わり、いつでも田植えが出来る状態になった「田」をいうとあります。作者は、代田という次のステップへの準備が整った時期の自身に思いを馳せています。鏡のように美しく、平らになった田面の広がり、希望に満ちた未来を感じさせたことでしょう。作者の、自身を振り返った句が珍しく、推測してしまいました。(典子)

賑やかな妹を送るや金銀花
賑やかに妹を送るや金銀花

七郎衛門吉保

生前のいつも元気で賑やかな妹さんをしのびつつお別れをされた。「金銀花」は二人をつなぐ思ひ出の花なのでせうか。次句ではこの妹さんにふさはしく「賑やかに」送られたと。二句でお互ひに助け合つて一句のやうである。「早苗田に元氣な水路歓喜あり」「古古古米植田のとなり休耕田」と俳句表現の面白さ、魅力に開眼されたやうにみえる。(喜孝)



秋の着物 その一 秋袷 七郎衛門吉保

前回第七話では日本伝統工芸展との関りからの着物を取り上げた。今回は日本伝統工芸士との関りと着物を記す。ここ数年一段と顕著になっている地球温暖化の影響により日本に秋は無くなるのではとの声が出るほどの変わり様。本来の秋は九月から十一月穏やかな時間の移ろいに沿って景色も風情も変わっていき日本文化を象徴するに最も相応しい秋にも拘わらず。大歳時記に記載された着物関連の季語は九日小袖・後の更衣・秋袷・秋のセル・菊襲、と四季の中で各段に少ない。はてはて如何にの感がある暑い時期の単衣から表地と裏地の組み合わせも樂しめる秋袷。それに相応しい着物地として本塩沢がある。

越後湯沢に隣接する塩沢町、塩沢紬と本塩沢（塩沢お召し）の生産地に縁あって、糸の染から織り上げまで一貫して対応している工房の知古を得た。家族経営規模の工房であつたが、製糸・染織・生織の各分野とも日本伝統工芸士の資格保持者である。ちなみに工芸士資格業務分野は織物・和紙・文具・石工品など多岐にわたり現時点の保持者は三千三百人ほどのこと。製糸から製織までの一貫工房であつたことから 色・柄・出来上がりまでオリジナルな着物を保持することができた。塩沢お召しは 糸に撚りを掛けた伸縮の大きな着物地。身に馴染みやすく着心地の良い秋袷になる。

豊満といふを隠せず秋袷 岡安 仁義

まだ生きるつもり秋の袷かな 鈴木真砂女

（二十三頁写真参照）

季語あれこれ「後の月・ほか」

《ハロウィン》

変装をしなくても魔女ハロウィーン
 ハロウィンといふ馴染めぬ行事後の月 篠田 純子
 ○9でゴミ袋もらふハロウィーン 篠田 純子
 ハロウィンや渋谷あたりは異界めく 秋川 泉
 ハロウィンにデビットボウイもマイケルも 秋川 泉
 ハチ公像撫づる人ありハロウィーン 篠田 大佳
 ハロウィーン渋谷で待つや検温器 大日向幸江
 典子さんは「後の月」と季語を据ゑハロウィーンの季語
 化に反骨心を示してをられるのがおもしろい。

《後の月》

後の月砧の銘の茶杓かな 芝 尚子
 列島に悲嘆つぎつぎ後の月 長崎 桂子
 布團から疊に移る後の月 佐藤 竹僊
 日暮時思はぬ日差後の月 長崎 桂子
 どの道も真つすぐに見え後の月 堀内 一郎

十二胡の音色かそけき後の月 森山のりこ
 待つほどに白蝶貝の後の月 赤座 典子
 猫のほぞさがしてもみむ後の月 佐藤 竹僊
 後の月ちんまりとある燕の巢 佐藤 竹僊
 尾根出づる時の逡巡後の月 定梶じょう
 癒されて厨あれこれ後の月 長崎 桂子
 水中にもやもやのあり後の月 佐藤 竹僊
 後の月この世に比丘尼橋ふしめい二三 佐藤 竹僊
 「白蝶貝」の句、発表されたときになぞらへに感動したもののだが色褪せない。



「後の月」より「十三夜」の使用頻度が高いのに驚き。
《十三夜》

田の窪に湧く水絶えて十三夜 渡邊 友七
 十三夜鏡の中にねる少年 佐藤 恭子

横書の手紙書きをり十三夜
 抱きもどす猫の見上げる十三夜
 枕辺にいつも蝋燭十三夜
 少年のジェルの香淡し十三夜
 鍵をさす音指先に十三夜
 歌舞伎町の女と言はれ十三夜
 ひきしまる風もの寂し十三夜
 十三夜そろそろ眠き天ノ邪鬼
 十三夜小筆が含む墨淡し
 十三夜ピエロの涙三角に
 大地震の憂ひ続きぬ十三夜
 布團から疊へ移る十三夜
 トンネルを出づるふたたび十三夜
 十三夜もらひ風呂とふありし頃
 ピアニストの靴底きれい十三夜
 大木の次つぎ伐られ十三夜
 姑とやつと裸のつきあひ十三夜
 十三夜後ろから来るフランス語

芝 尚子
 芝 尚子
 佐藤 恭子
 佐藤 恭子
 後藤 志づ
 堀内 一郎
 長崎 桂子
 関口 ゆき
 関口 ゆき
 森山のりこ
 森山のりこ
 佐藤 竹僊
 定梶じょう
 定梶じょう
 佐藤 竹僊
 芝 尚子
 斉藤 裕子
 鎌倉喜久恵

少年の鏡に笑みし十三夜
 十三夜身辺音もなく更けて
 パトカーの音遠くあり十三夜
 十三夜鴉のこゑのとぎれとぎれ
 ぬるき湯に身をゆだねをり十三夜
 十三夜何とはなしの立話
 十三夜横紋筋はそつとして
 天雲のうしろにうごく十三夜
 手を替へて墨磨りおろす十三夜
 遅れ癖今もつづきて十三夜
 子の影を踏みて佃の十三夜
 寂かなり雲離れゆく十三夜
 黒眼がちなりし飼犬十三夜
 誘ふには人の老いたり十三夜
 空つぼのバナナの箱が十三夜
 けふ蒔きし畝に影添ひ十三夜
 十三夜ひとりほぼる塩むすび
 野良猫が部屋のぞきをり十三夜

佐藤 恭子
 木村茂登子
 早崎 泰江
 佐藤 恭子
 田中 藤穂
 佐藤 恭子
 佐藤 恭子
 佐藤 恭子
 鈴木多枝子
 佐藤 恭子
 佐藤 恭子
 早崎 泰江
 竹内 弘子
 田中 藤穂
 佐藤 竹僊
 定梶じょう
 佐藤 恭子
 田中 藤穂

十三夜木枯は膝はげまして（八田木枯） 佐藤 竹僊

大江戸線から首出したる十三夜 佐藤 竹僊

いく度も出てみて見えず十三夜 田中 藤穂

「て・に・を・は」に押戻される十三夜 赤座 典子

雨風が払ひ清めし十三夜 秋川 泉

うたた寝の窓から見ゆる十三夜 秋川 泉

自転車を追ひかけてゐる十三夜 秋川 泉

狛犬も阿の獅子も十三夜かな 定梶じょう

牛に眼のとろりとしたる十三夜 大日向幸江

えがらっぱいガラス窓越し十三夜 長崎 桂子

水没の車を照らす十三夜 大日向幸江

「抱きもどす猫の見上げる」「黒眼がちなりし飼犬」「野

良猫が部屋のぞきをり」「牛に眼のとろりとしたる」と

十三夜を動物と詠まれると新鮮な十三夜となる。

季節に聞らず《雁》をあつめました。

冬の雁坂の途中の家に用

旧住所宮園通冬の雁

北へ行く吾子見送りぬ冬の雁

冬の雁幸か不幸か捨石に

わが影と夜食分け合ふ冬の雁

赤黄の絵具の滲む冬の雁

冬の雁四十五度の棹となる

ささやきかそらみかとも冬の雁

冬の雁近き他界の水平線

あらはれてまたあらはれて冬の雁

曳舟の綱に力や冬の雁

荒川の黒き流れや冬の雁

鄭重な挨拶門前冬の雁

おほきくもちいさくもなり冬の雁

蔵越えし赤松黒松冬の雁

冬の雁だあれもぬない夜となる

雁風呂のいはれを熱く子に語る

佐藤 竹僊

佐藤 竹僊

芝宮須磨子

森 理和

渡邊 友七

松村美智子

松村美智子

佐藤 恭子

松村美智子

佐藤 恭子

後藤 志づ

後藤 志づ

松村美智子

佐藤 恭子

松村美智子

佐藤 恭子

篠田 純子



冬の雁あほぎひわひわ唇乾く
 行く雁の一羽はおくれ湖の上
 雁や鳴く未明の夢や妻子あり
 抱きし嬰の温み夕空雁帰る
 春の雁南宋時代の館越え
 雁渡し渡つたあとの一つ星
 雁渡し疊の上に洗面器
 雁わたる人にもしつぽありし頃
 歳時記に遺る夫の字雁渡し
 首のべていづこ目指すや冬の雁
 燃えるごみ出す日たまたま雁帰る
 雁渡し深井戸の蓋ずれてをり
 初雁やまんままるの子のおしり
 一里来ても波音雁の空昏れぬ
 雁わたる貨車の連結旗をふり
 松虫草雁ヶ腹摺山雁未だ
 雁渡る高き山より白くなる
 一縷なほ羽搏つよ帰雁海の上

渡邊 友七
 渡邊 友七
 渡邊 友七
 渡邊 友七
 東 亜 未
 鎌倉喜久恵
 佐藤 竹僊
 定梶じよう
 田中 藤穂
 鎌倉喜久恵
 定梶じよう
 田中 藤穂
 東 亜 未
 渡邊 友七
 定梶じよう
 須賀 敏子
 東 亜 未
 定梶じよう

喉から蹠も見せむ過雁かな
 雁一縷帰るバス待つ列にゐて
 雲低く不漁の先駆け雁渡し
 雁一縷帰る洋上時化つつあり
 冬の雁ひとしたしき歩きぐせ
 棚吊つてものが片づく雁の頃
 八十路兄あの世とやらに雁渡る
 三段跳の前に何歩も雁の空
 かりがねの鳴きこそ渡れ犬も仰ぐ
 かりがねのうしろもつとも追ひかける
 かりがねや波頭無限の九十九里
 かりがねや神事篠笛ひよろりひよろり
 「雁ヶ腹摺山雁未だ」と地名を見事効果的に使はれた。
 実際には雁は見えぬのに雁の匂芬々の句だ。「喉から蹠
 も見せむ過雁」彼女は辞書の虫。句を通していろいろな
 言葉を教はつた。「過雁」を私も使ひたくなつた。「ひと
 にしたしき歩きぐせ」雁の歩き方をかう見えたのかとつ
 くづく感じ入つた。

佐藤 恭子
 定梶じよう
 長崎 桂子
 定梶じよう
 竹内 弘子
 定梶じよう
 七郎衛門吉保
 佐藤 竹僊
 定梶じよう
 定梶じよう
 遠藤 実
 定梶じよう

《秋風》「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音に

ぞおどろかれぬる」。暦が秋を知らせてくれると古今集
のこの歌が口をついて出てくる。「あきかぜ」「あきのか
ぜ」「しゅうふう」と機に応じて使ひわけける。「金風・素
風」をつかふこともある。

秋風とつづやいてみる二度三度

鎌倉喜久恵

秋風や笑ふほかなし老いに老い

芝 尚子

秋風のぼくが叩いて渡る橋

堀内 一郎

秋風や樹海暗闇皆無口

吉成美代子

火口丘秋風の髪ふきあげる

鎌倉喜久恵

秋風や古服捨つる大包

田中 藤穂

秋風や水の匂ひの非情めき

渡邊 友七

戸籍一人秋風爽とまた寂と

田中 藤穂

炎天秋風疊の上も山河なり

佐藤 竹僊

秋風の庭に出されしままの椅子

高橋 信佑

石に貌あり秋風の尾に坐る

堀内 一郎

暮の秋風に流さる蝶の翅

長崎 桂子

秋風におぼれ妣より老いふかむ

佐藤 恭子

篠笛の指秋風をあやつれり

田中 藤穂

木にのぼるから秋風が見えてくる

堀内 一郎

秋風や抱へて温きフランスパン

木村茂登子

額縁を出て秋風にとりまかれ

木村茂登子

ゼッケンに秋風入れて草スキー

吉成美代子

臉を過ぐ秋風のかろがろし

佐藤 恭子

秋風に驚く木菟は目を見はり

定梶じょう

全身が秋風の的となり老ゆる

渡邊 友七

秋風やねんきん特別便来る

篠田 純子

秋風や石の肌より母の声

渡邊 友七

秋風や樹ごと樹ごとの幹の肌

田中 藤穂

秋風や地を這ふもののやはらかし

堀内 一郎

秋風に無情といふを知らされて

木村茂登子

四時過ぎて秋風抜ける銀座通り

赤座 典子

秋風に身をゆだねたき揺るる椅子

早崎 泰江

秋風や遠き山々呼び寄せる

早崎 泰江

捨てる捨てない秋風に訊いてみる

田中 藤穂

白菊と白百合ずしり秋風裡
 胎児のこゑ耳にとどめて秋風と
 東より秋風を入れ歯を磨く
 秋風と道連になり途中まで
 秋風や降る度松は色増して
 秋風や両国橋まではね太鼓
 秋風裡まなこはぬらすためにある
 秋風のごんごん溜る藁の家
 秋風や空家の庭に猫二匹
 忘れもの届けやうとても秋風
 秋風の通る廊下に職人の
 秋風に全指さはさは手話の女
 秋風の通る廊下に職人の
 秋風の短冊散らす句会かな
 秋風の届かぬ地中電車待つ
 秋風のくまなく巡るビル谷間
 役終へて玉葱小屋や秋風裡
 秋風に平伏す如き野面かな

佐藤 恭子
 佐藤 恭子
 田中 藤穂
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 篠田 純子
 佐藤 竹僊
 佐藤 竹僊
 秋川 泉
 佐藤 竹僊
 大日向幸江
 大日向幸江
 大日向幸江
 森 なほ子
 森 なほ子
 森 なほ子
 赤座 典子
 佐藤 竹僊

秋風やヒヤシンスハウス今日も留守
 秋風をいうれい蜘蛛のいとひをり
 秋風やまだ収まらぬ脳多動
 息長く眞夜の秋風庭とほる
 安曇野ははや秋の風小梨熟る
 秋の風蛸焼の鯉節が散る
 青い蝶秋の風うけ鮮やかに
 額外す秋の風立つ煤け壁
 つながれし人の行方や秋の風
 秋の風鏡の顔の母に似し
 拭き掃除背中を秋の風が押す
 秋の風ポプラ並木の迷彩色
 石臼に蕎麦は擂られて秋の風
 秋の風綱頼りなき山の階
 糸切歯駆けぬけてゆく秋の風
 森 なほ子
 佐藤 竹僊
 篠田 純子
 佐藤 竹僊
 渡辺 友七
 栢森 定男
 早崎 泰江
 渡邊 友七
 堀内 一郎
 河合 笑子
 松村美智子
 鈴木多枝子
 堀内 一郎
 芝 尚子
 佐藤 恭子



熱氣球横にながされ秋の風
 一人居の身をいたはりて秋の風
 金絲雀の籠とおもへり秋の風
 秋の風川原毛艶とつがひの歩
 やうやくに夾竹桃に秋の風
 男ひとり友禪流す秋の風
 土手の草みごとに刈られ秋の風
 足輕の脛にある布秋の風
 犬柘植の実に然々と秋の風
 彼の楠に振るるが慣ひ秋の風
 秋の風迷彩色の木肌かな
 カリヨンの音のながれ行く秋の風
 秋の風右左見て岐れみち
 秋の風親子の鰐バス見送る
 焼菓子をはろほろ食へり秋の風
 秋の風グランドゼロをつつ抜けに
 秋の風影が笛吹く豆腐売
 忘れものしたやうに吹く秋の風

早崎 泰江
 河合 笑子
 佐藤 竹僊
 佐藤 恭子
 早崎 泰江
 芝 尚子
 早崎 泰江
 佐藤 竹僊
 堀内 一郎
 堀内 一郎
 鈴木多枝子
 芝宮須磨子
 堀内 一郎
 早崎 泰江
 鈴木多枝子
 堀内 一郎
 渡邊 友七
 鎌倉喜久恵

隣る木へかかる蜘蛛糸秋の風
 とんぼうのまなこの硬き秋の風
 いきものにうしろすがた秋の風
 忘れられ秋の風鈴鳴り止まず
 太股のはちきれさうな秋の風
 どの子にもいとしく吹けよ秋の風
 両の手で白湯飲み干せり秋の風
 秋の風石より腰を浮かしたる
 川沿を行けば橋あり秋の風
 ロープウェイ降りて見あぐる秋の風
 大秦に鞍馬天狗や秋の風
 門前の石段に罅秋の風
 秋の風水輪をひろげ鯉の群
 木木揺らし路地吹き抜ける秋の風
 法要の読経にわたる秋の風

佐藤 恭子
 佐藤 竹僊
 佐藤 竹僊
 堀内 一郎
 鈴木多枝子
 須賀 敏子
 篠田 純子
 佐藤 竹僊
 鈴木多枝子
 吉成美代子
 佐藤 恭子
 田中 藤穂
 早崎 泰江
 芝宮須磨子
 早崎 泰江



しなやかにすすき群なす秋の風
 秋の風波紋つぎつぎ玉藻池
 白壁に靴跡ひとつ秋の風
 観音の胸ふくふくと秋の風
 年ごとに引力増ゆる秋の風
 初秋の風通りゆくローカル線
 細綿を着てわたりゆく秋の風
 秋の風吉原大門考の影
 晩年は色即是空秋の風
 秋の風鼻を擽る魚焼く香
 鈴鹿峰墨の染め分け秋の風
 秋の風糸のころ草のそのあたり
 秋の風ものに憑かれた百日紅
 後輩の墓に詣でる秋の風
 銀河系宇宙に列し秋の風
 ほふりゆう寺かはらぬものに秋の風
 猿石も吾れを見てをり秋の風
 秋の風陳列棚に石包丁

吉成美代子
 吉成美代子
 吉成美代子
 篠田 純子
 佐藤 竹僊
 長崎 桂子
 佐藤 竹僊
 佐藤 恭子
 木村茂登子
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 木村茂登子
 佐藤 竹僊
 森 理和
 井上 石動
 佐藤 竹僊
 竹内 弘子
 竹内 弘子

秋の風鼈甲飴のすぐ乾く
 秋の風減りゆくものに消臭剤
 われより先はらわたのあり秋の風
 鐵棒は垂直に落つ秋の風
 マネキンに見えてゐるなり秋の風
 通帳へ差し入る風も秋の風
 横たはる體の下を秋の風
 グーグルでぐるぐる迷ふ秋の風
 園児等の無心な舞踊秋の風
 死ぬことは忘れて生きる秋の風
 庭桜大きな洞に秋の風
 手庇のかなたの母へ秋の風
 GOTOで少し晴れ間と秋の風
 マスクに曇る手柄話や秋の風
 荒川の空いっぱい秋の風
 廃駅の森の木霊や秋の風
 浸むやうに円安続き秋の風
 手を添へて脚を動かす秋の風

佐藤 竹僊
 中川句寿夫
 佐藤 竹僊
 佐藤 竹僊
 森 なほ子
 井上 石動
 佐藤 竹僊
 篠田 純子
 長崎 桂子
 篠田 純子
 秋川 泉
 佐藤 恭子
 七郎衛門吉保
 篠田 大佳
 秋川 泉
 篠田 大佳
 七郎衛門吉保
 亀田虎童子

目的地定めかね晩秋の風

篠田 大佳

蓮華升麻初秋の風に鈴振れり

森な ほ子

蜘蛛の巣のまだやはらかし秋の風

佐藤 竹僊

秋の風提灯の如コキア揺れ

七郎衛門吉保

ちりぢりにときに固まり秋の風

佐藤 竹僊

水茎の清清「金風白露秋」

東 亜 未

金風は墓場の崖をのぼりけり

篠田 大佳

ひととひとは櫛にからまる素風かな

篠田 純子

温め酒素風をすくふ掌

佐藤 恭子

碧霄と松の沼面に素風かな

七郎衛門吉保

「篠笛の指秋風をあやつれり」「全指さはさは手話の女」繊細な指その指の動きは秋風も親しげに絡まる。「手を添へて脚を動かす秋の風」今の私の日常がすでに詠まれてゐた。

《茸》

裏山にきのこ持つ娘と知り合へる

赤座 典子

初茸や小笹の中の風の音

関口 ゆき

暗闇に毒鶴茸のしろじろと

吉成美代子

漆櫃の初茸飯と濁り酒

竹内 弘子

痔のツボは百會にありと烟茸

佐藤 喜孝

友からの箸使ひ初む茸飯

山莊 慶子

背山より鹿の鳴き声茸買ふ

田中 藤穂

木の実はね茸は謳ふ苔の森

森 理和

松茸飯三合炊の織部窯

東 亜 未

松茸や燃えて出でくる備長炭

東 亜 未

松茸飯おかはりの焦げ削る音

東 亜 未

年故か松茸飯の香のうすし

芝 尚子

木茸のことに騒がしフライパン

竹内 弘子

今だけのやはらかさとして真菰茸

赤座 典子

賜りし松茸の香はカナダ産

森山のりこ

故郷の山は豊かに茸狩

須賀 敏子

山は晴茸はのびずを切り分ける

森山のりこ

生酔ひの本音がのぞく茸鍋

斉藤 裕子

木洩れ日の幹に茸のシャンデリア

森 理和

新潟の人は茸を見分けたり

須賀 敏子

装ひては二つ三つ足す茸飯

斉藤 裕子

炊立ての湯気香りたつ茸飯

さてさてと男が結ぶ茸飯

茸番の今は昔の話かな

決断の箸つけにけり茸汁

松籟にまざる人声茸山

茸汁住職むかし会社員

騒がしき夜の明け暮れや茸煮る

茸取り獣道ある事を知る

いかがですセシウム入りの茸汁

あけび籠下げて分け入る茸山

茸取り人招きよす毒キノコ

茸の名「くずれ」なれども光る味

朝靄の底よりぬつと火焰茸

茸汁「こはい」に漢字二つある

茸いろいろ炒め煮る焼く夕餉かな

山彦に踊らされてる茸狩

昼の月初茸ごはん炊き上がる

けむり茸八十歳になるといふ

斉藤 裕子

斉藤 裕子

中川 旬寿夫

井上 石動

中川 旬寿夫

森 なほ子

田中 藤穂

大日向 幸江

森 なほ子

大日向 幸江

大日向 幸江

七郎衛門 吉保

秋川 泉

森 なほ子

長崎 桂子

大日向 幸江

秋川 泉

佐藤 喜孝

派手好みなれど良き人卵茸

チャー飯に茸たつぷり日曜日

一汁の茸「くずれ」に感嘆詞

茸狩分け入る森に丸太小屋

深き森そこそこあそこ茸狩

猫を抱き茸に埋もれる少女かな

山盛りの茸の料理パンを焼く

フィンランド絵本の中の毒茸

友老いていつか茸の目利きなる

デパ地下の松茸売り場見てるだけ

くづし字の判読難し茸汁

伐採の茸あまたの太き幹

まだ見たことも増して食べたこともない茸がこんなに

詠まれてゐる。「鶴茸」「真菰茸」「たもぎ茸」「くずれ」

「火焰茸」「卵茸」。いつか会へるだらうか。

森 なほ子

田中 藤穂

七郎衛門 吉保

秋川 泉

秋川 泉

秋川 泉

秋川 泉

秋川 泉

亀田 虎童子

都築 繁子

篠田 純子

秋川 泉



《夜長》

無伴奏でおもひきり歌ひたき夜長
 久に縫ふ針目のをどる夜長かな
 なんのかんのほぼ五十年夜長妻
 片口の酒を夜長の人思ひ
 縫糸をとがらせ夜長の人となる
 幾度も志ん生を聴く夜長かな
 夜長妻哀れ私を介護する
 面白くなき笑劇を観る夜長
 与へられしいのちと思ふ夜長かな
 一人居の夜長名画に浸りける
 寝顔から笑みがこぼれし夜長かな
 笑ひ声絶えて久しき夜長なる
 夜長人さも無きこともある如し
 はらからと話は尽きぬ夜長かな
 影笛に秋の夜長を楽しめり
 コンビニ夜長気働きよき娘をり
 蠟燭のほのめく虚空夜長かな

竹内 弘子
 松本 米子
 堀内 一郎
 河合 笑子
 佐藤 竹僊
 後藤 志づ
 堀内 一郎
 竹内 弘子
 斉藤 裕子
 赤座 典子
 佐藤 恭子
 堀内 一郎
 堀内 一郎
 早崎 泰江
 森山のりこ
 長崎 桂子
 長崎 桂子

嫁終へて母と語らふ夜長かな
 取つときのワインの封を切る夜長
 なつかしく夜長を子らの服を編む
 針穴のちいさく見えし夜長かな
 一二冊故い「馬酔木」を見る夜長
 床の間の払子夜長を守りをり
 夜長星あかんぼ宛にハガキ書く
 雨音の淋しく聞こゆ夜長かな
 夫の鼾聞きつつ寝入る夜長かな
 縫ひぐるみとお話してる秋夜長
 グラッパとジャズを愉しむ夜長の灯
 白黒の昭和の回顧夜長かな
 サルコペニア防ぐ筋トレの夜長
 「無伴奏でおもひきり歌ひたき」カラオケで五番街の
 マリーを楽しさうに歌つてゐたなあ。「嫁終へて」にど
 きつ。「サルコペニア防ぐ筋トレ」頭が下がる。
 齊藤 裕子
 竹内 弘子
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 竹内 弘子
 東 亜未
 田中 藤穂
 斉藤 裕子
 斉藤 裕子
 田中 藤穂
 赤座 典子
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 長崎 桂子

(佐藤喜孝記)

ハイヒールの総理大臣あらばしり

佐藤竹僊

戦後八十年今、ぐつと時代が舵を切らうと変らうとしてゐる。八十年といへば私の来し方はほとんど戦後といふことになる。どのくらいの年齢から戦後といふ言葉から解放されるのであらうか。戦後といふ中にゐたことは確かだが、十六年生れの私と、父母や戦争に駆り出された世代とはちがふ。私の戦後すぐはなにもかも飢といふ一語で説明できてしまふかもしれない。そのことに思ひが至ると父母の苦労が如何ばかりだったかとおもふ。頭が下がるのみである。長子はどうしても父母との関りが長くなる。「白玉や父母遺る長男に」と最近詠んだ。

戦後といふ語でもう一ついまだに覚えてゐることがある。小学校に入つたのが昭和二十三年。この年新学制が始まつたと知る。入学前、父は片仮名を私に教へた。それがなぜか急に平仮名を教へはじめた。若い女先生が「これから戦争をしない平和な世の中になりました」とうれしうに話されたことが忘れられない。こんなおもひで八十年を過ごすことが出来た。世の中に感謝しかない。このおもひを子々孫々にもと念ずることしかできない。

掲句はまだ新総理が決まる前に予断で句会に出した。嘘を吐かなくて済んだ。ほとんど川柳と出席者の意見が一致した。

(十月二十四日記)

あとがき

今月の表紙

東京・中央区新川の新川大神宮の境内に咲く木槿の花です。かつて、新川は舟運の町で、特に酒の取り扱いが多い町でした。物流網が変わっても、酒造会社が事務所を構えるなど、酒との縁が長く続いています。大神宮は、新川の河岸に位置していて、江戸時代の活気を想像させます。(撮影・墨沁)

熊

町中で熊に襲はれて人生の終焉を迎へるとは。あな恐ろしいニュースが連日伝はってくる。いまでもテレビで、此処に嫁いで六十年はじめて熊を見たと言記者に答えてゐた。鳥獣戯画にも熊はゐない。日本画家も恐ろし気に虎を描くが熊は描かない。江戸時代でも山中はいざ知らず町中で熊に遭遇したという話は目にしない。『和漢三才図会』は熊の習性について

「性軽捷にして好んで縁上高木に攀る。人を見れば即ち顛倒し自ら地に投ず」と。『俳諧博物誌』では「人を見れば地へころがり落ちるといふのはどういふ料簡かわからぬが、この習性らしきものを捉えた句が一つある。

人音や熊ののたりに散さくら 轍車

『俳諧博物誌』は一九八一年に「日本古書通信社」より発刊された。町中での熊騒動はもしかしたら有史以来

の変事か。十月の句会で自衛隊にお願いできないものかと呟いた。

ケサランパサラン

七郎衛門吉保さんが元氣になられ寄稿があった。喜ばしき限りです。お会ひした時捕まえたケサランパサランを貰っていた。馬鹿馬鹿しさに心が和めばこれ幸いと。AIでは俳諧にはケサランパサランの俳諧は見当たらないさうだが現代俳句で「ケサランに逢つたのか昼寝人」と「二番手のケサランパサラン春と来し」を探してきた。そしてケサランパサランは季語ではないのでトパサランと季語の付け方の助言もいただいた。AIに作句法をご教授いただくとほまさにケサランパサランである。

(喜孝)

二〇二五年十月号

発行日 十月二十五日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話

090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／福井美佐子・ティリ エイマ

会費 一五〇〇円(送料共)／一年

ゆうちよ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)

